都名考

之

ホ 2
286

都鳥考

286

ち 2

角田川梅屋鞠塢居士撰

杉苔考

羣芳暦の書八百二十種の草木名を考七十二候一花五日を盛とし
凡三百六十日ゆるゝも西月ゆゑ十二月を十二冊目録一冊これを閏月と
して全部十三冊也○ふるこ鳥ゝ(ほとゝぎす)みやこ鳥(ちどり)
鳥あれどゝて考せられつ羣芳暦附録加しぬ　天山堂叢閲

ホ
門 雑部
號 ~~ホ~~
巻

宮古島は石上ふる地御國ゆゑ
世のたとゝ川の名もゝ
かゝゝゝ又他のかを学へる人もひるの名ハ
系國よのゝ栖鳥なれバ
中ひとゝのる名をゝるせゝ原始萬葉集ゝの万葉集ハ
四十六代天平勝宝孝謙天皇の御宇左大臣橘諸兄勅をなし撰
書未成ゝゝ薨ゝれハ平城天皇乃御宇
撰集成ゝ是を狭とゝ万葉集撰ゝの時代のゝ者ゝ
狭ゝゝて一宮せを幷冲云此集の末後をえて密よ思ふ
中納ゝ大伴の家持卿の歌ゝの集まて撰ゝ撰ゝ是を記
部島大考

明治二十七年四月七日
市島謙吉氏寄贈

天平宝字三年を下されるる事の侍りて世に伝るとぞ云へり堀江河
物語の事の八家持卿の事と平安天暦の帝の御時廣幡の女御の
生めりさせ給へりしるしてはありて源順大中臣能宣坂上是城清原
元輔紀時文これを梨壺の五人といふ此人々に詔して昭陽舎梨壺より初て
万葉集に和点をくわへしめたまふこれを点といへるなり梨壺の一人
なる源順能宣にありて下る時越前より物語の事を倭名
類聚抄の撰者と延長四公主の教命を蒙撰選云々大日本史云勤子内親王の為に和名鈔二十巻著云此和名抄より鷗漢名鷗
和名鴛鴦物語と称といふ種なるべし。なほ考合すべきの事なれ
人の説あれども知へし和名抄をえるに和名抄をえらびすべて漢名抄を
順徳院御撰八雲御抄云物語八南四川ありて京四川ありとも

又いづくにも栖と云く南四川の物語とは伊勢物語を以て世に名
づくといへとも物語の撰者の時代のすぐれあり一定せず
よて南四川の物語の一巻八長今集をもて説と在原業平朝臣八
奈良帝万葉集ナル
平城天皇の一男阿保親王の五男也とぞ中ほどくしき物語考
の説とも古今和歌集八六十代醍醐天皇の御宇延喜五年四月
十五日詔を奉て御書所の別当紀貫之大内記紀友則前甲斐
国凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等撰ぐ紀貫之
物語の事を云ふ忠岑に物語の部を分ち書しるす後世名抄
より云ふ事なるの伝来八紀の貫之を祖とぐく基俊俊成と伝て家に
お伝ると二事象八為世ぐまある歟阿が伝へて経賢孝尋竟恵竟孝

郡鳥六考

東野州常縁宗祇道遥院実隆称名院公條三光院実澄細川
言隆卿と倩来して八条殿中院殿烏丸殿なとゝ礼言なり
倩〳〵古今名禽の第一三鳥の倩之は三鳥の倩接添て志ゝして
都鳥の御講釈をとゝ言ゝ也数名八国也る所の眷徇悉く接ぎ
名之又宗祇の眷相〳〵倩〳〵礼〳〵流を堺倩接といふ也ゝ東都
優頭屋〳〵倩〳〵を京氏倩接といふ也ゝ東都倩接もに
都鳥八国也る所の名之の人々の御流の名る数名をとり始く
名の鳥を何よくたゝ〳〵変来よ已る巻も又書つ事川
南都の優頭屋とゝふ八林宗二のすに牡丹花眷相より源氏物語城
倩ゝ林逸抄五十四巻を撰せり又節用集二巻南都優頭屋

林宗二ゝ作之と本紙書目録よ〳〵ゝ宗二実名林逸といひゝ、
宋の和靖ゝ好なるよ〳〵云倩ふ今節用集の巻中に梅歌原
本と称せ古写本を巻末ゝ明応元年眷言と京花押
あり林逸を林和靖ゝ好といふゝのゝ所をゝ
清の補稼軒ゝ堅瓢集曰林可由ゝ〳〵和靖七世の孫
称せ和靖ゝ家〳〵ゝ〳〵ゝ已ゝ梅聖俞ゝ序中に云へ
ゝ姜石帚詩を倣ゝ嘲曰
和靖当年不娶妻因何七世有孫兒
若非鶴種并梅種定是瓜皮搭李皮
寛文癸卯孟冬撰延宝年刻北村季吟撰。伊勢物語拾穂抄
都鳥大考

云ふなるべしと云ふ説あるべけれども云々元孫文撰文和年刻沙門空海撰ずる勢語臆断は然らば撰者の名を詳にせざるべし云々載せたる後世好事中の撰ずる日本事蹟考云ふの一名なるべしと云ふ

もに説ありと云ふこと好事改年上本を賀茂真淵撰ずる伊勢物語古意は説の一名なるべしと云ふ事なり

説あるべしと云ふ説あるべけれども真淵は説の一名なるべしと云ふ説あるべしと云ふ説あるべし

説の一名なるべしと云ふ説あるべし

説と云ふ文字のそなはれるより説を説くなるべしと云ふ説を説くなるべしと云ふのなり

三日十年集のうち

郭鳥考

角田川　梅隠鞠塢居士撰

伊勢物語　二巻　定家卿自筆天福本武田本

真字伊勢物語　二巻　村上天皇第八皇子六條宮具平親王御撰

舊本伊勢物語　三巻　綾太理校訂金龍雄杜多序

此物語を明和の比偽書と云ふ　本居宣長云偽名の人物なるべしと云ふ

伊勢物語髓脳　寫本　在原滋春作自序有り

是は中頃の偽書と云ふ　滋春は業平の男なり父の流を汲む中頃の人なり

伊勢物語知顕集　寫本　大納言経信卿筆作と云ふ

伊勢物語抄　十巻　誰人作と志れず

伊勢物語愚見抄　五巻　一條兼良公

此抄後花園院長禄四年に〇寛文十三年六月刊行

伊勢物語宗祇抄　一巻二本　此抄舊名宗祇山口記云々

伊勢物語惟清抄　寫本一巻　外記舟橋環翠軒宗尤作

伊勢物語肖聞抄　寫本二巻　後柏原院の御宇牡丹花肖柏聞書

伊勢物語闕疑抄　五巻　細川幽齋　慶長二年孟冬

伊勢物語難義註　寫本一巻　作者法眼宗伯

伊勢物語初冠　五巻　加藤槃斎　兼庶五於建仁寺書　万治年刊行ス

伊勢物語集註　十二巻　一華堂切臨　西三条内府実澄公ヨリ老沙彌乗阿伝り奥義云

伊勢物語勅講抄　寫本二巻　明暦三年八月後水尾院御講釈聞書

〇伊勢物語拾穂抄　二巻五本　拾穂軒北村季吟　寛文年刊行

〇勢語臆断　五巻　沙門契冲　享和三春歌行

伊勢物語童子問　十三巻　荷田春満　和漢注解すべし研幽微疑わしきもの和合をとる

〇伊勢物語古意　六巻　加茂真淵　寛政五年九月上木

伊勢物語章甫鈔　八巻　岨山春幸作　正五位下若狭守紀宗直殿アリ　宝暦刻ス

勢語通　二巻　五井純禎　二条后斎宮等のみを[illegible]

伊勢物語傍註　二巻　加茂季鷹　安永五上木ス

〇印の引書ハ[illegible]を除と[illegible]書へ

倭姫世紀　日本紀纂疏　後拾遺

續古今集　古今六帖　齋宮女御御集

古本忠岑集　源順集　夫木集
壬二集　八雲御抄　土左日記
宇津保物語　狭衣　更級日記
十六夜日記　廻國雜記　新撰字鏡
本草和名　和名抄　藻塩草
陸詩廣要　名物辨解　本草綱目
東鑑　大和本草　本朝食鑑
筑前續風土記　能角田川　梅花無盡藏
日本事蹟考　歌林名所追考　廣益倍説辨
万葉集見安補正　高砂增々抄

大和本草云武蔵国隅田郡都鳥ヲ鳥以鴫都鳥ト未知是否篤信按ニ西土ニテ都鳥ト称スル鳥有リ脊黑ク腹脇白嘴ト足赤シ嘴長シ水鷸形ニ似其形ウルハシ伊勢物語ニ云都鳥是ナルカ

頭黑ク胸黑ク背黑ク腹ト脇白シ両羽裏皆白ク尾先黑ク嘴ト足赤シ嘴長シ眼ノフチ赤ク飛ヲ下ヨリ見レバ白キ鳥ニ見エ上ヨリ見下セハ黑シ足ハ千鳥ニ似テ水カキ少シ有リ三指足也啼声ヒヤウ〜〜〜ト鳴鷹ノ觳ニ似テ和ニメ高シ又或時ハ鶯ノ谷渡ト云如クツヽケテモ鳴至テ声ウルハシ多クハツカリナク羣鳴ハサコソト思フ塩ノ満干ニ隨ヒ浅瀬ニ出テ餌ヲ求水邊ヲ好ミ鴫鶉ノ如ク深水ノ上ニテ餌ヲ求ムモノニハアラジ

古今集云川ノ邊ニ遊フト本文ニヨク合リ

筑前續風土記云故多ハ多樂ノ訛ルノ由ト云〜

鳴ヲシキ一云ハ和俗ノ所製也云〜

万葉集加萬目鴫ノヲヲヨメテ

万葉集都多 堀江川より流ス○鴫

伊勢物語略のたまひとあるみくに略の所ゆえ

鷸ミヤシギ 嘴長ク大サツヽミヨリ小ニ脇長ク背ノ毛茶褐色ニシテ足長ク首少長シ尾白ク尾先黑キ文アリツヽサノ裏白ク小丸文アリ本草ノ鷸ニアリ又羽マダラシキハ羽ニ班點多シ腹白シホトシキヨリ少大也嘴長シ味ハホトシキニヲトル小シキ山シキ薄墨胸黑鴫トウチコ首王シキ常ニ喪ノ取食ノ是ヲシラシキト云尾先白キ故ニ名ク マダラシキ カヤタリ カヤクキ 京女シキ 嘴ノ長シキ メタイシキ 黄足シキ シヤクシキ 山シキ 此外品類多シ

此ノ種類ニテ嘴ト足ノ赤キモノハ都鳥ト江鷗トナリ

鳧鳴夜深鳴羽為閑寂之趣稱鳴羽搔夏秋最多シ

江鷗　首ヨリ脊ヲカケテ灰色ニシテ腹白シ嘴ト足赤ク左右ノ目ノ脇ニ黑点アリ大サ鳩ノ如シ鴎ノ内此江鴎ヲ以テ都鳥ニ充シモノカ

鷗　水邊多シ大サ鷺ノ如クニシテ喙尖ル尾ナシ白色ニメ微シク灰色ヲ帯フ又白キアリ一種海中ニ栖ヲ海鴎ト云

大鷗　トキノ形ニ似テ黑ク班アリ首白腹白脊灰色ヲ薄シ嘴長シ海辺ニ栖シイラ鷗鳩ニ少シ大キク首黑腹白羽先黑シ貝原云信天翁鴎ニ似タリ淡青白色ニメ喙長シ

水鵠　息大サ鳩ノ如シ其羽灰色ニメ羽先黑シ嘴ト足黃ナリ冬間味最吉ナヘケリ　水鵠ノ類ニテ関東ニテイヌケリト云。ケリク鳴故ノ名ニ

古今和歌集巻第九　羇旅哥　在原業平朝臣

むさしあぶみ国とをかりけるに武蔵の国と下総の国とのさかひにいとをかしくなりて都のいとしうおもほえけるに川のほとりにむれゐてなきけり川の原といふなりけりそれをみてなにとなくいとしらくもかなしくてこの鳥なにぞと問ひけるに答へていはく都鳥といふなりけりこの鳥の名をまことにうたがはしくおもひけるにこの鳥のなにはまことにそれかあらぬかとうたがはしきなりけりみやこ人もこの鳥をみてなにはまことにそれかあらぬかとうたがはしくてこの歌をよみけるとなむ

ちるきこるなちとあり。そこあるよ川のわたりは
はしいりの家もみくぬるちりうれを皆人
うんとうひいてくるよりあるを何をとひ
うれでこるちんみやこるをいひるをきてく
ようをる

若みくおいてきこをんみやこを
いうおをとを人をいうのやちややと

伊勢物語 狩ゆきくるむさし国と武蔵
ふさの国との中よりとたちあるを川をうれを

南田川といふさの川のちをにもれおてあやし
やをハ波ちあくまくもをみるうれをいひ
あくるに河ちをやあよ紫ハめうれぬを
いよよをて波らんとをうに皆人をのいひく
をの京をとふ人なきあるあひをるれいも
をうなきこるれをとあひとあるき略のたか
をちちあるをのうへよ拾ひて泉を食京もも
えをぬるちれハみなん人見をうひ深をよひ
うれハををちん就をるとをを学て

なにしおはゞいさことゝはん都鳥
わかおもふ人はありやなしやと
とよめりければ舟こぞりてなきにけり 下略
此【伊勢物語】ハ業平東下りの事をしるせる物のよしに伊勢か筆をくはへて七
条后温子へまゐりしを八偽としし七條后ハ昭宣公の娘君にて二条
后ハ同じ公の妹君にて七条后の時をさゝげさせし伊勢ハ七条后に
仕ふる女房なるをその仕へつる后乃御里なみあしくも密なるを
書あらはしてある物語ひやハある昔何すべ段はおぼせりおもひ
たる人東方にも滑ゆるはバゆるやうのよ思ひて要なる事をなくと云
此の世の人ミなそを知りつ云 【愚見抄】云 后中将二条の后を
ぬすまんはおこしに出家せしか後
髪をおやさんか為に陸奥國八十嶋にいたりて
小野小町か髑髏の秋風の吹に法華をくを
あなめ〳〵といへる歌をもつけゝると云ふ事
江次第の第十四の巻に載侍り匡房卿の説
證據とそなるべし 云々

在原業平朝臣 三品彈正尹阿保親王五男也
承和十四年正月補藏人嘉祥二従五位下（此時廿五歳）貞観三従五位元慶元年（此時三十六歳）
遷爲右近権中将元慶二年兼相模権守後遷兼美濃権守卒時
年五十六 ○世尊寺伊行云ありはら平あつま下り説偽なりと云々 よそすゞ川都鳥も偽くと云説あれハその説を云

昔男あつまのくに住わび覧(もとゝん)てゆきけるあり 略
八ツ橋のかきつばたを見て六月の初めなるべしとあり
後にかくれかのことまつに雪の降んとの歌ハさ月つ
きのは六十日へしとあり武蔵の国角田川なる
みやこの里田面の居を八月の比とそ云かくて居り歌と
居くはらはまて古事談に業平朝臣盗二條后官仕前
将去る間足才達服宣ヨリ追至奪返之時切業平之本
鳥云く仍生髪る程稱見寄枕畏向関東云々

兼良公云ハくなんとそ云ハきこゑ

二條后の流言(サタ)を遠さけんとあ足才達(ゆくさとゝつ)をとらへて切まのあ
ゆ枕と号して弟らを考へけるものなるべし 云々

勢語臆断
更級日記
よ志りつきの宮とむさしの境なる川とを
いつくしみの世なつさとのはよりておきて武蔵の
宮の日記よりて武蔵とおもはゝ横との中よりてあ宮川と
いつゝ在女中抜のいさことゝんとゝるゝるゝ中
抜集よハ宮こ川とあり歌あて海つめれハお横の宮
なるぬとあるハ抜ゝこ中抜集とハ此物語をこせる

ゆゑや但し孝標女上総の国より都へのぼるとて渡られ
たることを書されしハ更級日記一向見えしさまも
あるまし 万葉第三 に 弁基法師

「まつち山夕越行て廬前の角太河原にひとりかも寝ん

とあるを駿河なといへり

貞観年中にハみちのく海道すみた川渡り此川筋に付て行道ありしに図に下総何しに越られんとハいふまや

又業平ハあつまのくの方へ下向あるに上総へハ何せんとて越
られしならんとも覚えすいはれある更級日記を引合されハ
角太河の名この外見えさりけり 是迄 契沖

この万葉集の歌の「まつち山夕越行て[illegible]の歌ハ
駿河のすみた川と契沖ハいはれき 按(キンウ)に 駿河に廬崎ハまつち山なし
すみた川と云河もなしまた紀伊国のすみた川と或人のい
はれき紀伊國に(まつち山ありていほさきなし)すみた川の名のみあれと
流れて川なしと云く後の世の名所集にハ武蔵のすみた川の
事の中に入られしをまて今の俗に此川の頃とかに
いふ橋と云所を作りたるハいかにや夕越行てといふべき
山も待らぬ所なるをやと或人ハいへと此すみた川の下を宮
戸川の古名なり観世音の尊像のいはれも今にかくやさぬ
土師真人仲知(はしのまつち なかとも) 檜前濱成 檜前武成 と云人々の古跡にて此待乳山を

真人
まつち山と云 浅草寺を金龍山と号ス又まつち山も金龍山の名も其いはれなり 歴代ハ人の知所也 扨この
待乳山の形を 宣命臺と云又車塚と云 井沢長秀撰ニ専ら夕越路にてと
いふべき山も侍らぬといへどもよろしき山なればとて越路と
又まつち山より角田川原ハ夕越路にてもあるまじかりぬるかな
○更級日記のしもつふさとむさしの境にあるふとゐ川 式人云 相模国古
はやう川或ハ六ツの川なりと云説あれと撰所かん
角田川西岸考ニあし略 真渕云 更級日記 云あすだ川と云ハ在五中
将集ニハ角田川とあり又其後も如かれハ相模国より
ならぬ云こゝハ所の名のまうへる傳に書しるし土人の

角田川関屋のさと
下總国青砥関
集古種 下総国葛西郡青砥村古城跡碑青砥左衛門古事有今も葛西ニ西あをと東あをとゝ云村あり青砥村をわけて村と云青戸村ともいふ
まつち山夕越路にて唐崎の角田川をしのぶなりふる詩んじ此所ハ田子浦などゝあるし次ニまつ川ハむさしなるハ駿河なるべしと云唐崎の地名より角田川の名あれこれを捨て近くし考と見ゆ

出羽の国よ。あらき川の名ハなど角田川の説ハ此所の
かたに隅田になりとて国人のいへるらく角田川といふ川
なりといへど六帖ハ業平の娘の作ありともしるし古考
見あもいへるよく田子浦まゝの次の所をあれが駿河の
ほとり角田川とて今なほしるの舞てしかハさとのまが浦
唐京ハ流ある所なれハ。いかに浦て大名もしるしにあるべし
武蔵に角田川の名ありといへと唐衛と云地名
あまたの人にいはれ此所も駿河の名あるべしと従五分駿河
ならハあまた角田川をも見る由なりに考せしか菜跡出る
より古人のいひ出したりし考も語り伝しくなし
紀伊国にまつち山の名ハあれど角田川の名なし

抑武蔵国の角田川ハ二十一代集の歌に云へる
又歌の集の部等数多にいとまあらぬ中に詠ミの
書ふも本流なるべしと思ひ角田川を能り
あらいハいかゝやされと唐橋てふ名の地名れ
なるを思ふにそいハ姉くもたゞ〳〵さゝ〳〵ら
奚沖芦間の考あるを隅河の淨瑠璃ハ誤る
なれハ唐橋てふ名もまゝべしと云
武蔵の角田川も誤る歌ハ例多けれ
あれハ唐橋てふ名もまゝ云ゞ〳〵
隅河よりもいと少なし武蔵ハ山もあれた
いゝ武蔵の歌なるべし

かくこの歌ハ角田川の名あれと武蔵國角田川ハ
隅くに風景なし唐衣ハ古くはをえ唯清雅閑
東都ハとゝもれハこゝやひをぬむとゝ月ハ
盛ハ長堤もまゝの中をあゆむ〳〵秋萩芦渕ハ
川ハ掬さゝ〳〵をゝ〳〵漕入と疑しも宜なるか
代角田川のゝを墨水と云ハ 真字伊勢物語 云墨田
川の文字より出るとの今ハ唐〳〵隅田川の文字を用ひ
角隅とも文字ハかゝるべしハ 古今集 伊勢物語 云
角田川を 本居宣長 般田川と訓を誤り本居氏云

新勅羇旅　「ちはやふる人はえせやあらぬよに角田川水の夕暮の雨」　皇太后　俊成

拾玉集七　「誰ゝ又朝立やらてなのむらん角田川水の初雪の雨」　祝部尚長

壬生品下　「渡もりてゝ問さよにちかくせ角田川水の名乃名もうしし」

「山川は栖都多ふ名のあり今の世に宮風を好めり」

云伝ふる都多ハ背狗是く後白とあるを誤て斑白とあるを誤て斑白ゝ

本文の白鳥とあるハ鴨去都多ん（カモメコリ）といしまり路の一名なり鳥

と為ゝこハ世ゝと為ゝ（フルキヨ）（ヨロヒ）よ世人ゝもゝゝしゝ

元ひく故ゝ（フルキヨ）より本授ゝ（ヒキアテ）ゝ光後亟考云

新拾遺旅　俊成卿　角田川ゝさとゝ

ゝゝ名は後とゝゝ

都多ゝ名

拾遺負外下　新院御製

ゝ秀ゝとゝひゝ

ゝゝ川水ゝ

ゝゝ

武蔵の国とゝ川ゝの境ゝいとたゝ

川ゝとゝ

鞠塢按ゝ角田川ゝ武蔵井一のゝ川ゝ

河原ゝ知ゝ今の世の川ゝ貞観の

川を注ゝ亟角田川水ゝ武蔵。東ハ下総（シモツフサ）

南ハ荒川ゝ陸奥海道

ゝ川の角田川ゝ川幅廣ゝ

ゝゝ

今の舟渡ゝ

ゝ今の世のゝ定渡ゝ

きゝ〳〵按ずるに中務ハ武蔵より上総を右まえて常陸の国漕形孝標の姓ハ中務ハ武蔵を右まえて孝標の国漕形〳〵

[illegible]も此所〳〵出漕渡せしものゝ名も今ハ[illegible]
渡ゆきしなり又[illegible]ものゝ
孝標の姓の源にて渡りぬるにハ孝標の国〳〵にいるゝと
いふハ渡会の名〳〵漕形〳〵ものゝ[illegible]
[illegible]も知へし　大祓のてまいまて多くの名あり

孝標　右中辨従四位上資忠朝臣一男　寛仁元年任上総介四十五
長元五年任常陸介六十　従五位下ハ此ハ[illegible]
下り[illegible]時の名ハ此[illegible]

[illegible]の孫きめ　[illegible]の渡松　[illegible]　[illegible]　孫と此
姓ハ[illegible]従五位ハ此年[illegible]元八百年ゆ成ハ[illegible]
五五中ハ集とあれを伊勢物語の名ハ[illegible]世の人乃

名つけ〳〵名とゝ云されと　源氏物語の弘角の[illegible]五五
ハ紀とゝ云又　源氏繪合の[illegible]　伊勢物語ハ三位とゝ合せ
てとあれハ　伊勢物語とゝ名もたし
かゝるものもなくもきこえ[illegible]
中務の又此河を渡りてとゝ[illegible]
[illegible]も角田川の大[illegible]ハ　万葉集の[illegible]
川ハ[illegible]ハ[illegible]と[illegible]も川[illegible]大[illegible]
[illegible]も角田川[illegible]川[illegible]
[illegible]流て田〳〵[illegible]川と云渡会大[illegible]本朝通[illegible]
此川〳〵[illegible]を[illegible]渡[illegible]　夫木集　梅花無盡蔵を[illegible]

下よりてゐる筆とハ甚れたり撰ぶる所の角田川考著し略せ契沖が角田川考に又をあり

隅田とも。又むかしハ一面の川なれバなりと云　於門記
よりて世に合戦のより葛西三郎居城とす
角田川原を葛西と云　まつち山宮戸川の下隅田洲崎（すさき）
流るゝ所を宮戸川と云なり。都鳥今もそねこの洲崎に
なむ又洲崎村の牛の御崎（みさき）貝塚年中の祥のあり
牛島柳島寺島とかいふあり　更級日記　あすた川を
あハ助字なり、すみだ川之とかいふ藏長卿の序说哉
原始（もと）とす古地に要しく作し移しとかすや。和の
世に角田川の名をといへども歌に詠る角田川ハ都ちか
きを武蔵に限るべしと云く

さる物しも嘴さきのあしとびしとあかき鴫也
おほきさなる鳥のうへに擬ひていへるなるよ
契沖云ちしと見と赤と見るに下にみ鳥のと入てんいはへし或抄
に都鳥ハ鶺鴒（せきれい）ハ尾く短く猿ハ白しと云り或人ハ此鳥鵠（コノトリ）よりも猶
にまでありびかきてあきらびかなる物なり鴫より八おほき
なれと是をあ八物のちいさくあれバへぬる所を書るよし
中き或抄に鴫の觜足ともに赤なれ大きさなる鳥と云なりと
をハうけ見えちいさきことをも云おも都鳥さきさ麻
のことしなど云も都鳥さきさハほそくいそんかごとし

伊勢物語拾穂抄云ける如くしも志ろき考　季吟

なるハ鴨といふなるへしかもきさ鴨なとなり　肖閑弐

闕疑抄曰ハ背むき遠く後白し鴨の中にくれ

なハ大なるをと云く今の世ハ鴨なるとそ有る鴨なハ

おもきこと志れる廣き河の出るそ多く鴨なとり

ふへくしる為らを略の大きなるといふなるし狩に訣る

日本事蹟考云武藏國隅田川在武藏下總之界水深有

舟鳥曰都鳥啄足皆赤形似鴨好食蛉昔在業平来遇

詠和哥云く

契沖云或人云都鳥ハ鴫より分おし大きおそ、かもの中に

ましりて拾ふものと書きさきのいちいちくゝ鴨ハ鴨のたき

さとおかるるようとおもきさ按ふ今も隅田川の邊ハ鴨とい

ふの二種あり一川を大小ふく嘴と足ともに赤く

らゞ一川ハ形も鴨よりハたきさにして赤と足とともに

赤し是都鳥なるべし先ハ二種ともましりまく魚

などを取てをり私人ハ共に鴨なと云く

出渕云古本俗説ハ某の書より誤れるものなさて

鴨ハ大小あり大なるハ鴨のごとく小なるハ鴨のごとし鴨も沢ハ

なるを小さく山なるハ大きなるを小鴨を書く只て沢に

あるほどくちばしにハ大てこたゞかゝるをすそたなきにあらず
ゆるくまへし又狗白く鴾毛さる名と云ハ偏へかもありしを
さるくろて羽の灰色なるもひろまと背ハ背も鴾も白きに
あ羽のつまハおしくろきを多きてにしろき鳥と見るハ
さしるす又或人云古今集にハ川のほとりにあそびけりとあて
ことありけしば又ふハゑのまゝ拾ひてと見へハ足ハ尺へ
しやと志渕若此鳥ハ鷗にて群つて捨る都ま飛びたるに
事もあるべしされハ此宮ハ頻しとされハ鴎を志らせんとや
詞をそへつらん又鷗の大さなるを志るさす大なると云説ハ
あらしまゝて何の大さなるをたく知りて事なすべし 花之志渕

此都鳥て云名あれどもあるが中に背ある白き鳥鴾毛白き
鳥にて佳なりけりみやこ鳥と云をもて引書よいてる人ともこの
都鳥の説を志るるに李時珍云鷗を都鳥をあいとなりまる
して契沖志渕もいよいよこれのみを鷗の一名を都鳥と云
されハ今ハ都鳥の名鴎と二種となりけるハいづれを都鳥
てふものにさだめんと或人の云されハ若鷗を都鳥と云なれ
元禄の頃より此ある新説を志り都鳥と云ハ千年あれ
のちよりして天正慶長まで古説契沖季吟志渕
等学まてもされ人々とも英雄人をあざむく後くこの
都鳥の考信しさし本説云都鳥と鷗の事なきまゝ

ちかくよりて　引書をもて鳴かざるよしを云

万葉集　　大伴家持

船きほふ堀江の川のみなきはにきゐつゝなくは都鳥かも

後拾遺羇旅　いつこへ下りけるに旅都鳥のはのおちたるを

見れはよみ侍りける　　いつみ式部

こととはゞありのまにまに都鳥みやこのことを我にきかせよ

續古今雑中　新院いまだ御位の時都鳥のなきけるを聞て

人々に哥よむべきよし仰られける時　少将内侍

吹風ものどけき花の都鳥さきまかする世のことやとふらん

續古今　　太上天皇

侍へるなハたきによしあしの侍るなり又京人のきゝ

語へるも必よしとのみ云へかし　万葉集に田口益人

上野よりまかるに駿河國浄見(きよみ)の崎にていほ原のきよみ

の崎又田子の浦なとよめるに次て無基の哥とゝく

まつち山夕越ゆきての哥あれハ角田川ハ廬原郡清見

の崎の邉にありしいほ原ハ浦邊なれハいほ原の崎の名に

ありし此角田川の哥も駿河國浄見の崎又田子の浦

なとよみしに次くとあれと按するに　古今集　伊勢物語　ゆとにそ月の

喚にはいと遠くなかなかへときこしぬらし

神のいつくしきまつりに奥州にまかりくだりしに
国の次に角田川をとて名あり　松にいとこと人の
歌をすれば苔書よりつゆ　こけばうき
けるやこゝろてつゆも殘河　武蔵国にまさこ川の岸といふ人は
ひとゝしさしれとまつちゆ夕越　越後の角田川社
国の名　スミダカハラ

駿河　紀伊國　武蔵　いつまこの岸ちるや　更級日記云
あまさこ川はまた村の須田川と云説もあり　古今集　むさしの国の
角田川とあれは性なる淀と也　古今六帖　よ出羽の国
あをとのせきの角田川あれてもゝんみやわこるゝと

都をもをしきゝねてかゝりおいちろうはさまよなりくやへん
都鳥あるをとゝはをもてこゝをたゝのはこゝをたゝしわ　小町
こゝを源のもゝしゝ吹上の家ありきの院のその岸く

宇津保物語

名あり　却　実ともこえて都をるをもをとゝ者さにして

十六夜日記　河佛　まさこ川のほとりにてありときゝしかを
都をとゝ者の嶺　嶺と見とはあきさはし　海おもをゝ
ゝとゝをん嶺と見とはあきさはし　我らゝをの都をるかも

十六夜日記　ゝをあなのはゝするもゝんをゝせはゝ落とゝ者いと

おほくとしひちかひて水のそこへもゆる思のうへ中もねたり
鴎ねるすさきの岩もよそならす波のかすこそ独よみわたりて

夫木集　公朝

承とむるなにはよ螺浮よこゝ寄るなりこれは京の川の名なる鳥も

夫木集　寂蓮

おもふ人あるにつけても都鳥あはれ今はと法の川なかり

八雲御抄　鴎　ふちえの浦たきの鴎

城鳥　ましこ川原なくても京ちかき川なとなり
或人云本文志ろきこ鳥とあるによろき鳥の統ハあまたふくし
菩志ろきこ鳥といふにはゆ鴎もあまたふくし鴎も白きこ鳥なるべし

むしろ後白しむね背よりねずいろなる白きこ鳥と云むまなるもわかうず

万葉集見安補安云白鳥四書へてねぶ白きを云へハ鷺又鵠をも
もみへこるとありといふなり日本紀ニハ白真名鶴
ともみえたり倭姫世記ニハ白鳥

八雲御抄　白鳥さきこの都ありと云万葉集ニ見えたし

藻塩草　鴎　廿六　かもめねるふちえの浦たきのかもめ

城鳥　卅四　ましこ川によめり又角田川なくても京の川なもあり白鳥の
ちしと見あさきに堀江の都こ鳥ともよめりけこの三さき寺も下略

二條家冷泉家の家の書にハしろき鳥の都鳥の法統
なり万葉家の家云ニハ鴎なりと云説るに万葉集ニ
都鳥家あり万葉集ニかもめの也みあり万葉集ニ
田鴫の家ありや此ころちあるに鴎の一名都鳥と云ハきこへぞ

京おもてみくぬるなりけれハ皆人見おどろ
ハつ橘のそかきつはたのめみ字をなのりそけ
もしハとそハ山友のうちよりあらなり 古今集 橘の初よ名聞の花まらけ
ふるこのしハとハ云家の何ものもよるるとなりつのてよ
あるるとそを注者なりこれよハかたらん
是ハ何者ぞといつかく始て人しるなれを
形状のかゝる物をそこそハ何と云るよ似つ
しきなと詳もしつけるあ何よ似つ何きと写もつ
鴨の大さ所とあるかく都名の形状を知せ拾う
都名いつくも栖名なれと夏秋をむとしたち東
中にをを産ふ名なれど曇をなむ言をハ鳴を
地よ栖今も夏秋ハ南田川ふも所をてあらハたぐ

の糸ゝ洲崎多く栖路のようなたぐ古今
集云川の名よ拾ひうとよ合を
皆人見しし次
今もよく人のしひなて路の一名歌名と見し拾う
路いつくも栖名の名ハ異不婚山家の名も雁鴨路ハ
生物をふんとも名を知名あるあ名よ中物の路を
三代實録 云ふ中将山朝臣ハ鞍貌閑雅放後わ
てふ拘略学善作和哥今の史よ略無才学
とあれと無ちその字を誤るとい也業平ハ唐人の
来りし時詩腕敏ハ法ハ法しるも史よ人ものを

必才学ぶ人ハ之 鴎の一名都鳥と知り鴎のたぐひ さとまりや書もせましや
こゝろなん都鳥とぞ
万葉集に都鳥の歌そのうちにもよまれしハさし鳥の名をぞ
先達て見る人ハ嫁なるものにこゝろなん都鳥と書り又友の
人にも従者(ださ)にも船をも論ずしつ着し今も嫁く見る物ハ
行くに似つると云て歌なりしや

○都鳥見へし所 [万葉集] 堀江川 [古今集][伊勢物語] 角田川
[後拾遺] 和泉東河 [夫木集] 津の国和田岬 [宇津保物語]
紀伊国吹上のはまさきハ未なくなど云の鉢鴎と大さに
ちかへ見。[源順] 都鳥の歌ありて。鴎の歌あり [十六夜日記] 都鳥の歌

鴎の歌 [土左日記] [六帖] 紀つらゆき
おもかさまさりおもふを
あやしくもかもめへ
こま波とこそ思ふらん
[古今類題]
かもめゐる汀の波や
まさりけんうつりて
ねもよハのうら風

又鴎の歌あり 此一条ハそれ鴎なり さる事を知べし 此外越後越中越前
能登加賀播磨尾張なとの歌多くありて此外にも鴎を
みなく都鳥と詠せしこの外にもあまたあり 又云いつくの
浦人も又その鳥をせいのまんまも都鳥と云をしらずしてあやまりの
鳥を漁人(すなどり)までも此名をしるも一の僻撰なしきやされハ
手の歌より都鳥てふことのたしかなる事を都鳥に
定めなし先に引書云 [伊勢物語] に誤せし人ぐの撰改
関白良経にして宗祇(そうぎ)清水の稀宗見牡丹花
肖柏(せうはく)細川幽斎此外さま人の是にも皆ある人もみな品
彼の都鳥なりと云をしもともきつきあるし [古今集][伊勢物語] ともに

ものきこゆるとそよろつさまなるなといふ人くの説も
いとかしこくもあらんかし。遺滴院殿の御使
きこゆしとある定家卿の法自筆の伊勢物語写
に假字ふりかきたるとあり。やくの字を
漢語くの字遠ひもものなるべやくの字を筆
点よりてかしとも遠ひあきらかなるべやくきき
鳥の嘴と見ゆ。さて書損とのみ
ゲ
なしてもなほ本授なりといふ。枇杷左大臣仲平公
ビワ
のかたうしはものびて伊勢のことくかのそせのつらゆき
ものなりけりと紀貫之のくしきをなりけりと

これ文字をわやまりて伊勢と業平とをひとつにまぜ
しは物語の作者の僻よりいふハ法なりといふ説をとるく
くの字しの字書損といふ」 山伊勢物語定本もひとつにまぜ
定家卿撰のひらがの本 武四本 天福本 ここ
一通とるかもとく書ものゆゑ朱雀院遍昭能本ハ紙や絹なて
業平の自記云更級日記中ハ 昭 記ものゆゑ。伊勢物語ものゆゑ左文中抄集と云説ハ猥云
本文遠ひなるもの多しと云ものて書損といふなるべし
○ものくしは物語ハ七本を一ハ業平の自筆の本二ハ具平
親王の本三ハ安部師安ハ安茂内侍の本ものゆゑ

二位の尼の本今ハ伊勢か中書の本十二本也長能狩使の本之
是によりて抄清書あり奥ニ親王の本ハ慈円のよりミへて多く
抄清多しある説におゐてハ本にいくつもの分けめハありといへるあ也が
道の分りを入るゝ之加茂の内侍の本ハ言ある本にいくつものかゝり
めなし是ハ燒失の本之燒残りたるよおかしきものを入るゝなり
言二位の尼ハ業平四代の末高階成章ものなる是も業平が
自筆の本にかく私の了めの説を入りしも能ゟ狩使の本ハ伊勢の
事を書の秘めよけしも是ハ業雅院の清特け説を秘蔵して
也能ハ流布るに仰付られ後鏡をつくらせて
流布にハ納め是へ見仍て流布の本と云是を以也能

此本は秘蔵よりて殊更に入て狩使の本と名付て
家の宝とせられし

[謡百番の内角田川]に狂女ハ梅若丸が母角田川渡るに
おのるハなほとゆ鳥にて候へ何ハ白もめと中山沖にて
鴎ともいへ千鳥ともいへ角田川の白鳥ハ都鳥とハ答
云ハぬへ実にや　是ハ下略
鴎を都鳥と云ハ角田川への歌より見えて此謡曲製ハ[源氏物語]
[伊勢物語][和漢軍記]古人の風詠をかりことかへ作りしものゝ善悪
邪正をたゞし寿を当としるく或ハ図出家或ハおかしく或ゝ

大和国三座有○外山○結崎 保昌 観世 ○坂戸○圓満井 金剛 金春

大森彦七相模入道田樂遊宴アリ

あれは風流を尽し作りかせしと云能作者は宦屋の孝之
金春 金剛為下掛 観世 保昌為上掛 貴人の法作もとなん人室百五代後柏原院
大永四年吉田藏人義持ゥ安東典厩の求よ意しかるるもの
作者名書し南田川能作者一説善竹一説観世世世の弥
ゆ猿楽を能と指まるよ古法を」教樂と云又或は折神楽為神
楽別申楽為田楽 江ノ納言匡房洛陽田樂記有 ゆ猿楽能は上古秦河勝の製
そのあり 猿楽原始は秦河勝製樂八六十六番と云河勝は欽明敏達用明
崇峻推古五代よ歴仕して風雅文采の人なり云々
将軍義満公の法時観世の弥生子又三郎名無行を将軍義政公上覧

あり足動を能始と 観世世河弥 観河弥 金春善竹 金春善鳳 生弥四郎 作者名
元亨数三百五十二番と 泉州堺住車屋道悦一流節奏して百番
なり自書して印板を西宮車屋本ならや
この能は云角田川よりて八何名おもせよ古ろきを八能名
能名八能名ハ古ろきを能名と世人やよりて能
用ひ能ごとし又伊勢よ角田川よかぶる能の事と能
名と云伊勢なしかるも男人の役なる歌
なのを鞍馬花を書の歌人みしるも
書法を用天下のその知人を能考能へやく

都鳥考

土左日記云くろゐる。貫之土佐守よりかへりて延長八年了
彼國よりゝ六年の後承平四年に任ぜられ京へ帰る時の紀行也
○土佐日記附注　人見卜幽　○土左日記抄　北村季吟
○土佐日記首書　宝永四五月刊行　○土佐日記注　藤原宇万伎

和名抄　云鵠　唐韻云鵠　他石反漢語抄云久呂止里　黑色水鳥也
或人云くろゐる鳥ハ鵜と云るとゝゐハ河へぜ。鵜ハ白まだらなる

神代巻　日本紀　鸕鷀　和名宇　万葉集　之麻津鳥。鵜と云

新撰字鏡　本草和名　和名抄　鸕鷀　大曰鸕鷀　和名志萬豆止利
小曰鵜鶘　和名宇　○鵠と鴉ハくろちがるべし
○ようこ鳥考の巻末くひな并くろゐる鳥考　近刻

欲識都鳥問鞠塢欲識鞠塢觀此書予一日
游羽田浦漁人指黑色鳥告予曰是所謂墓
水都鳥也此鳥性惡喧囂海將大風起必先
知之伏竄丘岡迯甚難矣予嘗以白鷗為都
鳥故不信其言歸語諸鞠塢翁曰漁人言信
然也予言升濤也今茲為著都鳥考則此書
是也披卷視予予一覽初發甚業矣且上古
墓水之廣大徵之勢語業平稱最大地歟僧

大同中来称似琵琶湖因安白髭祠以是察之淺流聚海苔洲頒游都鳥可推知也後世淺流変播穀地丘岡連民家居是故海苔流聚志那川都鳥逐游羽田浦是那去甚屋各得甚所也故曰欲識都鳥問鵜鳩欲識鵜鳩觀此書云尔

文化甲戌臘月　葛陂卜鄰識

元元書

二百年来。人所不得見之物。至於今日之我而始覩之則善哉善哉

曰不見猶

文運之剏興哉。余笑而頷之乃熟視之。其形状与五瀬話所稱相合。又與余昔見於佐渡鳴中者相符。於是數十年蓄疑頓釋。大為之歎歎矣。雖然猶見怪焉。夫都鳥則吾

武藏州之所產。而二百年來人罕
覩之者何歟。余嘗攜東臨考之。墨
陀者古爲潮來之大港。四方賈船皆
湊于此。時改地變陸見海退而港
遷于品海。今港距墨陀者凡數里。
於是物亦隨而移矣。都鳥海多也
豈得不渝其棲乎。墨陀之地今絕
無此鳥者於是焉可知矣。然而生

爲非怪者。且近居于品海而二百年來
東人莫知之者。不亦怪乎。博物好古
之士以爲都鳥曰仍苟且不復加
尋索者耶。又將爲淺之士亦已遺耶。
今吾因者人得好見墨陀之都鳥。則
此禽豈謂非吾故府金橫中之物
乎。曰題是言。
文化甲戌秋八月望

江戸鵬齋老人撰

菫堂蔡義書

眠帋雙字